

府中市の内海機械

AI分析システム導入から1年

生産性向上で効果を実感



金属加工業の(株)内海機械(府中市鶴飼町七四三―一、内海和浩社長)が生産効率のさらなる向上を目指し、近畿大工学部(東広島市)との共同研究で開発したAI分析システムを導入してから一年が経過した。内海社長は「機械の稼働率が一割ほど上がり、効果を実感している」と語った。写真。

同社は従来から、工場内の整理整頓をはじめとする「5S」運動に取り組み、業務効率化に努めてきた。その結果、機械の稼働率が三割程度向上する年が続いたが、その後一年ほど停滞したことから新たな手段を模索。同学部の片岡隆之教授との共同研究に着手してシステムの導入に至った。

内海社長によると、特に業務の下準備である段取り段階での時間ロスの改善が顕著という。あらかじめ設定した業務時間を超えると、内海社長らのスマートフォンに知らせが入ったり、工場内に信号が出されるため、「各自に『早く仕事をしよう』と考える習慣が根付いた」と話す。

「超短納期」を掲げる会社にとって、生産性向上は永遠のテーマ。「今まで改善に取り組んできた風土があるからこそ、今回も順調に進んだ」とする一方、「これで終わりではなく、さらなるDX(デジタル・トランス・フォーメーション)化を進めていく」と先を見据える。

生産性向上のノウハウは地域のものづくり企業とも共有する方針で、「備後のものづくりが発展していく下支えをしたい」と内海社長。